森の名手・名人シリーズ46

名人 小林 一雄（67）
岐阜県恵那市

聞き手 髙森 かな
岐阜県 麗澤瑞浪高等学校1年
平成27年取材

木地師
木目にこだわり、美を引き出す
―全ての工程を手掛ける木地師の思い―

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が認定されています。岐阜県においては、現在、50名の「森の名手・名人」が認定されています。

この「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

1. 木地師って言うのは

元々木地師って言うのは、桶を作ったり木を彫ったり、要するに木に関わるような人のことやったの。しゃもじを作ったりお椀を作ったりする人も皆、木地師って言われてたのね。ほやけど、昔に皆それぞれの得意な分野に分かれたの。大体、挽物（ひきもの）、指物（さしもの）、刳物（くりもの）と3種類に分かれとるね。挽物は、ロクロを回しながら刃物で削って、お盆とか器を作るの。指物は、木と木を組んで、机とかの家具を作るの。刳物は、四角い物とか楕円の物みたいな、ロクロで回しながらできん物を、手で彫ったりすることやね。でも今は、僕んたちみたいなロクロをやっとる人が、主に木地師って言われとるね。

日本の手仕事の歴史ではね、作る物を固定させて、手に持った道具で、削ったり、切ったり、張ったり、塗ったりして物を作るんやね。でも、作る木の器を手挽きロクロで回転させて、刃物を使って形を整えて器を作り出す。こんな作業工程は、日本の工芸史の中でも木地師だけの仕事やね。ほやから、僕がこの仕事を選んだことや、親父から修業ができたことに誇りを持ってやっとります。

仕上げ挽きの様子

2. 製材から漆塗りまで一貫して

うちは、材料を各務原の方で仕入れて、自分で製材して、漆塗りをするところまで一貫してやっとるの。一般的に、漆塗りは別の職人さんに仕上げてもらうことが多いけど、僕は漆塗りまで、自分の所でやることにこだわってるね。最後の仕上げの漆塗りは、女房や息子も、今、勉強してますね。元々僕は、木の表情を、木目の美しさを表現するために木地師になったようなもんやで、作り甲斐はあるわね。漆は自然環境の中で水分がないと乾かんもんで、冬に塗る時なんかは、本当に苦労するの。でも、自分たちの環境でどう塗るかとかも、長年かけて培ってきたもんでね。

木目を生かした漆塗りにこだわる

3. 道具も自分の手で

「思うようなものを作りたい」っちゅう思いがあるもんで、ロクロ鉋の刃の部分も柄の部分も全部、木地師が自分で自分に合った形を作るの。刃物を作ることは基本やからね。扱う木の状態に合わせて、刃先を作るの。刃物の材質としては高速度鋼（こうそくどこう）を使っとるの。柄は、自分の所の材料の中でも、加工中にあたってもショックが少ない柔らかい木を使ってます。欅（けやき）とは違って、柔らかい栃（とち）とか桧（ひのき）を柄にするの。

刃物を作る時には消炭（けしずみ）を使っとるね。買ってきた炭では当たりが硬いもんで、火花が出ちゃうもんでね。そういう炭は荒いもんだから、刃物の周りのすき間が多くなりすぎちゃうの。だから、消炭が丁度いいの。だから木を燃やして、わざわざ自分で作るの。

4. 自然の恵みは無駄なく使う

木を沢山切って、ロクロでお盆とかを作ると、中になる所は捨てちゃうでしょ。それを「もったいない」って言う人も中にはいるのね。でも、作った物を、長く何十年にも渡って使えるっちゅうことは、凄いエコなんですね。僕らは自分が気に入った木を買ってきますので、できれば最後まで使えれば良いんですけど、やっぱり捨てないかん所もあるもんでね。こういう所はちょっとした器や小物を作るとかね、なるべく無駄にはしないつもりでいますね。それでも余った木の切れ端は、炭を作ったり、乾燥庫で焚いたりして、有効に使わしてもらっとるね。

5. 瘤に惹かれて

やっぱり、自然の木っちゅうもんは美しいよね。どんな木でもそうやけど、幹に瘤ができる木と、できん木があるの。同じ木でも、普通の木目と瘤の木目では全然違っとってね。僕は、伯父さんが作っとった、瘤を取り入れた器とかを仕入れて売ってたの。その時に、この木目程ではないけど、これに近い木目を見た瞬間、「おぉ!!」って、心が震える様な気持ちになったの。「木にも色々な表情があって凄い」っていう感動があってね、こんな木との出会いがあったからこそ、今があるんだって思っとるね。

普通の木目でも同じのはないけど、似た感じのは揃えれるんやね。だけど、瘤の付いとる木は、本当に希にしか出ないもんで、頼まれても中々注文には応えれんよね。

原型の瘤が見られる栃の器の裏側

6. 宿木の美

宿木（やどりぎ）っちゅうのは、木の枝にできた傷に、種が飛んできて、そこから根っこを張って、木の栄養を吸って育つのね。だから、木を切った時に葉っぱも根っこも死んじゃうから、根っこがスルンと取れて、木に穴が沢山開いちゃうの。

昔は、穴の開いとる宿木はゲテモノって言われて、皆買わんなんだの。でも僕は直感で「これは面白い」と思ったもんで買ったの。その時、市場の人から「これは榉材の中でも特別で、宿木というんやよ」って教えてもらったの。僕は「この原木で、何か作ると面白いやろうな」って思ってね、お盆をはじめ、何点かを作品展に出したの。その時に俳句の先生が来て「宿木はね、万葉集の中に歌ってあるよ」っちゅうて。それで調べたら、宿木のかんざしを好きな人の頭に挿してあげたっちゅうような歌があってね。その他にも、世界的には、儀式なんかで使われたりしとるの。

宿木みたいに、穴が沢山開いとるのは、伝統工芸展には出せんけど、自分の個展には出しとる。個展の時には、こういう結構変わったものでも喜ばれるんやよ。最近、皆がこうゆう物を買うようになったちゅうことは、宿木の美に対する想いが分かってもらえた気がして嬉しいね。

1年中緑の葉を茂らせる宿木※

7. 扱いにくいからこその魅力

世の中には色々な人がおるもんでね。でも、それは木にも言えることで、木目が美しく出る木とか、粘っこい木とか、割れやすい木とかね。硬い木なんかは特にそうやけど、漆を塗らんでもチカッと光る木もあるもんでね。ほんで面白いよね。そういう木を見た時に「おっ!!」って思うか思わんかだけやと思うの。今はどっちかっちゅうと、そういう木の方が、味のあるものができるんやね。手をかけりゃあかけただけ、魅力が出るっちゅうことやね。

その中でも、扱いが難しいって言われとる神代（じんだい）っちゅう木があるの。神代は、千年以上土の中に埋もれた木のことで、「埋もれ木」とも言われるの。こういう木で作品を作ろうとすると、今まで土の中で抑圧されとったやつが一気に外へ出ちゃうもんで、割れたり狂ったりしやすいの。ほやから、大きい木はなかなか珍しいし、宝石を探すようなつもりで探しとる人もおったりするの。

8. これからの目標「守・破・離」

ありがたいことに、最初に親父の仕事を見てたからね。綺麗に仕上がった親父の作品が常に手本やった。技術面でも精神面でも、近づけようっちゅう目標が常に身近にあった。それに向かってやって来れたから、日本工芸会の正会員にもしていただけたのかも知れんね。

「守・破・離」っちゅう言葉があってね。昔からの決められた型や伝統を守ることは基礎として大事やと思う。以前はそれが大事やと思っとったし、展覧会の審査でも、そっちの方が認めてもらえることが多かった。でも、僕らも、同じものを100も200も作ると飽きるし。ある程度は楽しんで物作りをしたい時期やね。今は、「破」や「離」の部分も、楽しみたいと思っとる。昔からの伝統は大切に、自分がやりたいことには、どんどん挑戦していきたいね。それで、木の温もりをみんなに伝えて、個展なんかやった時に、お客さんが「いいねぇ」って言ってくれるのが喜びやね。

今回、息子が継承することになりました。けど、僕自身、木工の仕事の大変さをよく知ってるから、とても後を継げとは言えなくて…。自分から進んで「僕、ロクロをやりたいけど」ってことだったので、苦労することは間違いないと思うけど。後を継いでもらえば、この後もずっと親父から僕、そして三代目のような形で、木地師としての技術を継承していけることを嬉しく思ってます。できれば、親父、そして僕を乗り越えられるような技術を身に付けてもらいたいと願ってます。それを、一生懸命補佐しないかんで、現役で頑張って、少しでも息子の生きていく道を開拓してあげなくちゃいけないと思って、やってます。技術を全部は伝えることは無理かもしれんけど、せめて親父から受け継いだ技術を伝えていきたいですね。

[出典情報]
※「写真」ヤドリギ
http://yasousuki2.exblog.jp/8977492/

名人 小林（こばやし） 一雄（かずお）さんのプロフィール

- 生年月日：昭和23年4月18日生まれ
- 職業：木地師

会社員を経て、28歳の時に父親に師事し、木地師の道を歩み始め、恵那市東野で「小林ロクロ工芸」を創業。

平成6年に第6回伝統工芸木竹展で入選後、多くの入選を重ねる。

平成13年に岐阜県卓越技能者（名工）として知事表彰。

平成18年には、木地師としては、岐阜県で初めて「日本工芸会」正会員に認定。

平成23年には、第23回日本煎茶工芸展「栃こぶ拭漆高坏」で文部科学大臣賞を受賞。

その後も日本伝統工芸展などに出品し、入選を重ねるなど、高い評価を受けている。

また、地域の木工教室の講師やインターンシップの受け入れにも積極的に取り組み、ご子息を後継者に、技術の伝承とともに、多くの優れた作品を生み出されている。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
公益社団法人
岐阜県緑化推進委員会　専務理事　黒﨑隆司】